# ポイント

# 教師付き学習の経済学への応用

# 川田恵介

# Table of contents

推定問題	2
伝統的な推定	2
機械学習	2
応用: Bruns-Smith, Feller, and Nakamura (2023)	2
動機	3
Estimand: Income Shock	3
Estimand: Persistency	3
古典的アプローチ	3
結果	4
予測への応用	4
削減不可能な誤差	4
削減不可能な誤差....................................	4
信頼区間の計算	5
機械学習の問題点	5
モーメント法への応用	5
利点	5
有限標本性質	5
有限標本性質: サンプル分割	6
繰り返し DML	6
実装例	6
実例	6
Britto, Pinotti, and Sampaio (2022)	7
結果	7
サンプリング問題	7
問題の類刑	Q

Clustered sampling	8
MLR3 による実装	8
DoubleML による実装	8
系列相関	9
異なる母集団への適用	9
まとめ: 人間 VS AI	9
Reference	C

# 推定問題

- $\theta := T(f(X,Y))$  の推定
  - T := 既知の関数
  - -f(X,Y) := 母分布

## 伝統的な推定

- "伝統的な推定":  $\theta$  について、"信頼できる"信頼区間を形成する (Unbiasedness を重視)
  - "2 次的"な目標として効率性 (点推定量の精度アップ: 信頼区間の縮小)
- しばしば非常に厳しい関数系への仮定を要求
  - 改善策: マッチング法 + 回帰 (Ho et al. 2007)

## 機械学習

本講義では、

$$\theta = E_P[Y|X]$$

を推定する便利なツール

- "パラメタ"ではなく、関数を推定
- "機械学習": 極力近い関数を推定する
  - Unbiasedness は Must requirement ではない
  - 一般に信頼区間の計算も難しい

# 応用: Bruns-Smith, Feller, and Nakamura (2023)

• 母平均関数そのものを Estimand とする研究

- ランダム抽出された家計について"推移",  $\tau_i = \{Z_i, Y_i\}$ , が観察可能
  - $-Z_{it} \coloneqq$  家計 i の時点 t についての、年齢、学歴、時点、資産
  - $-Y_{it} :=$  所得
- 予測される所得  $E_P[Y_t|X_t]$ 
  - $-X_{it} = [Y_{i,t-1}, X_{i,t-1,...}]$

# 動機

- "所得変化" は経済学における重要な論点
  - 古典的なケインズモデルでは、消費 = f(所得)
  - 大きな批判: 所得変化の源泉を考える必要がある
- 想定可能な変化 VS 不可能なショック
- 古典的なアプローチ (自己相関モデル) は強い関数系への仮定
  - 機械学習で緩和

Estimand: Income Shock

- $\bullet \ \Delta_t := Y_t E_P[Y_t|X_t]$ 
  - 予測できない所得変化

Estimand: Persistency

- $\phi_{t,h} := E_P[Y_{t+h}|X_t] E_P[Y_{t+h-1}|X_{t-1}]$ 
  - t 期目の所得変化を織り込んだ後の所得変化
  - 所得変化の長期的な影響

#### 古典的アプローチ

• Blundell, Pistaferri, and Preston (2008)

•

$$Y_t = \underbrace{p_t}_{Permanent~income} + \epsilon_t$$

$$p_t = p_{t-1} + \eta_t$$

• AR(1) model

# 結果

- Boosting を使用
  - 所得の予測力: 線形モデルよりは高い
  - $-E_P[Y|X]$  の近似力が改善
- 所得へのショックが期待所得に与える影響は、時間とともに減衰
- 負のショックの影響の方が弱い
  - 古典的なパラメトリックモデル (AR(1)) では関数系への仮定から排除

# 予測への応用

- $E_P[Y|X]$  は、X から Y を予測する" 最善" のモデル
- ただし完璧に予測できるモデルではない
  - テストが重要

#### 削減不可能な誤差

•  $E_P[Y|X]$  の推定値 := g(X)

 $Y-g(X) = \underbrace{Y-E_P[Y|X]}_{\text{削減不可能}} + \underbrace{E_P[Y|X]-g(X)}_{\text{削減可能}}$ 

# 削減不可能な誤差

- Social Outcome についての予測は、根本的に疑わしいとの主張も
- かなり X を増やしても、顕著な個人差が存在
  - 例: 双子
  - 削減不可能な誤差が大きい
- 必ずテストを!!!

- 単純な予測アルゴリズム (OLS + 研究者による変数選択など) との比較も

# 信頼区間の計算

- E[Y|X] の推定はかなり野心的なゴール
  - どれだけ巨大なデータを使ったとしても、誤差が"常に"生じる

## 機械学習の問題点

- E[Y|X] の近似モデルを柔軟に推定
  - Nonparametric 推定と同様に、一般に推定誤差の性質を調べることが難しい
- 本講義の中心アイディア: 推定プロセスの一部を機械学習で行う
  - 機械学習の推定誤差を"無視"できるような工夫を行う
    - \* 誤差の性質について、緩やかな仮定のみを要求

## モーメント法への応用

.

$$E_P[m(\theta, Data, g)] = 0$$

として定義される  $\theta$  については、一般的な推定方法が提案されている

- 1.  $\partial m/\partial g=0$  を満たすような m を使用
- 2. g を機械学習を用いて、推定
- 3. 推定された g を代入し、 $\theta$  を推定

#### 利点

- 近似計算の精度を高めることができる
- 機械学習の品質への要求 (収束速度) を緩めることができる
- $\theta$  の**漸近分布**において、バイアスの正規分布を保証

## 有限標本性質

• 現実のサンプルサイズは有限

- 漸近性質がどこまで適用できるのか、シュミレーションを使って議論される (Knaus, Lechner, and Strittmatter 2021)
- 有限標本での保証 (Chernozhukov, Newey, and Singh 2023)

## 有限標本性質: サンプル分割

- サンプリングに伴う不確実性 + サンプル分割に伴う不確実性
- 漸近分布において、後者は無視できる
  - 有限標本では微妙
- マニュアル (Bach et al. 2021) で、推定プロセス自体を繰り返す方法 (chernonozhukov et al. 2018) が推奨されている

#### 繰り返し DML

- 1.  $\partial m/\partial g=0$  を満たすような m を使用
- 2. g を機械学習を用いて、推定
- 3. 推定された g を代入し、 $\theta$  を推定
- 4. 1-3 を何度か繰り返す

#### 実装例

- ① サンプル分割数
- ② 繰り返し回数

#### 実例

3回繰り返す

• 点推定量

[,1] [,2] [,3]

[1,] 0.1711335 0.1723741 0.1739766

• 標準誤差

[,1] [,2] [,3]

[1,] 0.005217462 0.005172795 0.005229372

• 集計 (中央値)

After

0.1723741

## Britto, Pinotti, and Sampaio (2022)

- 裁判所データと従業員-事業所データをマッチング (名寄せ!)
- D:= 大規模解雇に伴う雇用喪失
- Y := (認知された) 犯罪への関与
- X := 年齢, 勤続年数, 学歴, 賃金, 地域レベル変数 (殺人率、非正規率、格差率など)
- Causal Forest を採用

#### 結果

- 98% の事例について、条件付き平均効果は正に"有意"
  - 背景属性に関わらず、雇用喪失は、犯罪率を上げる
- 低年齢層、勤続年数が短い層で特に顕著

# サンプリング問題

- Semiparametric 推定 (含む機械学習)「関心のある母集団からランダムサンプリングされている事例」の含意を導く
  - そうではなければ何が言える???
  - データ分析の「見果てぬ夢」

#### 問題の類型

- 事例間に相関があるサンプリング
  - Clustered, Time-series, spacial sampling
- (サンプルの) 母集団外への結果の適用

## Clustered sampling

- 実証研究において、事例を集団 (Cluster) で扱う方が妥当なケースは多い
  - 集団 (企業、家計) をランダムサンプリングして、その構成員を調査する
  - 集団レベルで原因変数が固定 (学校への介入、村への介入)
- 集団内の事例は、集団間に比べて、より"似ている"可能性がある
- 対応: サンプル分割/Bootstrap を Cluster level で行う

## MLR3 による実装

• Task を定義する際に、Cluster variable (ここでは Cluster Variable) を group として定義

```
Task <- as_task_regr(
   Data
  )

Task$set_col_roles("ClusterVaraible", "group")</pre>
```

## DoubleML による実装

• Task を定義する際に、Cluster variable (ここでは Cluster Variable) を cluster\_vars として定義

```
double_ml_data_from_matrix(
    X = X,
    y = Y,
    d = D,
    cluster_vars = ClusterVariable
)
```

#### 系列相関

- 時系列, 空間相関: 事例間に近い/遠いがあり、近い事例間の方がよく似ている
- 私見ではまだまだ解決が難しい
  - Survey (Masini, Medeiros, and Mendes 2023)

#### 異なる母集団への適用

- Hot Issue!!!
  - X の分布についての調整 (Dahabreh et al. 2020)
  - X 以外についても感度分析 (Nie, Imbens, and Wager 2021)

#### まとめ: 人間 VS AI

- AI(機械学習) が BlackBox であることは、しばしば批判される
  - その通りだが、人間の脳みそはより BlackBox (!?)
- コードとシード値で再現できるので、推定を極力データ主導で行うことは有力
  - Principle のあるアプローチ (Urminsky, Hansen, and Chernozhukov 2019)
- 研究課題の設定、識別、要約に、人間は集中できる

#### Reference

- Bach, Philipp, Victor Chernozhukov, Malte S Kurz, and Martin Spindler. 2021. "DoubleML—an Object-Oriented Implementation of Double Machine Learning in r." arXiv Preprint arXiv:2103.09603.
- Blundell, Richard, Luigi Pistaferri, and Ian Preston. 2008. "Consumption Inequality and Partial Insurance." American Economic Review 98 (5): 1887–1921.
- Britto, Diogo GC, Paolo Pinotti, and Breno Sampaio. 2022. "The Effect of Job Loss and Unemployment Insurance on Crime in Brazil." *Econometrica* 90 (4): 1393–423.
- Bruns-Smith, David, Avi Feller, and Emi Nakamura. 2023. "Using Supervised Learning to Estimate Inequality in the Size and Persistence of Income Shocks." In *Proceedings of the 2023 ACM Conference on Fairness, Accountability, and Transparency*, 1747–56.
- chernonozhukov, Victor, Denis Chetverikov, Mert Demirer, Esther Duflo, Christian Hansen, Whitney Newey, and James Robins. 2018. "Double/Debiased Machine Learning for Treatment and Structural Parameters." *The Econometrics Journal* 21 (1): C1–68.

- Chernozhukov, Victor, Whitney K Newey, and Rahul Singh. 2023. "A Simple and General Debiased Machine Learning Theorem with Finite-Sample Guarantees." *Biometrika* 110 (1): 257–64.
- Dahabreh, Issa J, Sarah E Robertson, Jon A Steingrimsson, Elizabeth A Stuart, and Miguel A Hernan. 2020. "Extending Inferences from a Randomized Trial to a New Target Population." *Statistics in Medicine* 39 (14): 1999–2014.
- Ho, Daniel E, Kosuke Imai, Gary King, and Elizabeth A Stuart. 2007. "Matching as Nonparametric Preprocessing for Reducing Model Dependence in Parametric Causal Inference." *Political Analysis* 15 (3): 199–236.
- Knaus, Michael C, Michael Lechner, and Anthony Strittmatter. 2021. "Machine Learning Estimation of Heterogeneous Causal Effects: Empirical Monte Carlo Evidence." *The Econometrics Journal* 24 (1): 134–61.
- Masini, Ricardo P, Marcelo C Medeiros, and Eduardo F Mendes. 2023. "Machine Learning Advances for Time Series Forecasting." *Journal of Economic Surveys* 37 (1): 76–111.
- Nie, Xinkun, Guido Imbens, and Stefan Wager. 2021. "Covariate Balancing Sensitivity Analysis for Extrapolating Randomized Trials Across Locations." arXiv Preprint arXiv:2112.04723.
- Urminsky, Oleg, Christian Hansen, and Victor Chernozhukov. 2019. "The Double-Lasso Method for Principled Variable Selection."